2016年1月　AJCC研究会

研究会報告

＞＞＞　　イタリアのカメラ　　＜＜＜

2016年1月9日
於　JCIIビル　6階会議室
発表者　会員番号 0810　竹内 久彌

■イタリアにおけるカメラ製造略史

イタリアでのカメラ製造は、1839年8月にフランスでアルフォンス・ジルー商会がダゲレオタイプカメラを世界で初めて市販したその翌々月に、早くもエンリコ・フェデリコ・ジェストがイタリアで初のダゲレオタイプカメラを製造したことに端を発すると言われる。その後のカメラ開発をリードしたフランスに隣接する国として、イタリアはその強い影響下にあり続け、1880年以降には眼鏡屋が企画して、家具屋が製造するというスタイルでイタリアにおける第一次写真産業の開花があり、第二次大戦終了まで多数の工場や工房から極めて多種類のカメラが出されていた。そのなかで今回の研究会の持参カメラで提示されたものにはムレルUL、フィアンマ・アヴィウス、ムレルRX-Rが見られた(持参カメラ紹介欄 4、5頁、写真1、2、4)。製造会社としてはムレル・エ・ドゥローニ社が1892年から1930年までステレオカメラ、マガジンカメラ、ストラットカメラ、フォールディングカメラ、携帯カメラ、一眼レフカメラ、最後には127ロールフィルムカメラに至る、多種多様のカメラを150種以上出していることで知られており、品質的にもドイツやフランス製カメラにそれほど劣らないカメラを出していた。

その他のイタリア製カメラで特筆すべきは、1918年のジョバンニ・バッティスタ・タルターラによるファクト・アウトシネフォトの発明があり、このカメラの特許はフランスのデブリーに売却され、セットという名で発売された。また、1921年にはモーゾリンが35mm長尺フィルム使用のアーガスカメラを発売したが、これとほとんど同じカメラがパリのクラウスからエカという名で3年後に出されていることなどがある。

次に、1942年にドイツ・日本より一足先に第二次大戦を終結させたイタリアではフランス、イギリス、その他の国々と共に軍需産業からの転換を目的に、にわかにカメラ製造が活況を呈することになる。多くの中小メーカーからレンジファインダーカメラ、ミディアム・ラージフォーマットカメラ、サブミニチュアカメラなど多種多様なカメラが製造・発売され、とくに35mmカメラの領域ではかなり素晴らしい製品が送り出されたといえる。しかし、興味深いことに本格的二眼レフカメラとしては35mmレフのラッキーフレックスのただ一種類しかなく、ファインダー二眼レフもエリオフレックスのみであった。35mm一眼レフがレクタフレックスの1種類のみであったことも不思議と言えば不思議である。

1950年代末頃からドイツや日本で始まった35mmカメラの一眼レフ化はカメラの高級化、高価格化を意味するものであり、イタリアの一般大衆の期待するところとは逆の方向を向いていた。これに対してベンチーニ社やフェラニア社がとった道は、安価でシンプルでありながら一応の写りをもたらしてくれる簡単カメラ、あるいはトイカメラを作って販売することであった。コメット(5頁、写真5)やコロールといったベンチーニの作るカメラは単純かつ堅牢でありその経済性が広く受け入れられ、1970年代までイタリア国内で大変普及したといわれる。記録によれば、ベンチーニ社の最後のカメラはコメット400およびコメット・ラピッドで1970年の発売であり、トイカメラはフィレンツェのムピが1975年に発売したものが最後のようである。これらがイタリアで製造されたカメラの掉尾をかざったものとなった。

註：イタリアでのカメラ製造の歴史の詳細は「マルコ・アントネット、ダニーロ・チェッキ：Italian Camera Makers」「カメラレビュークラシックカメラ専科 No.43、1997」を参照されたい。

■戦後イタリアで製造された特徴あるカメラたち

イタリアでのカメラ製造が最盛期を示した第二次大戦直後にはイタリアらしいと言えるカメラが数多く生まれている。そこで、以下にその一部を著者が所有するカメラを用いて、紙面の許す限り紹介を試みたい。カメラ名の後の括弧内は、会社名、発売年を示す。

● 35mmライカ型カメラ

ガンマ　　(写真1、2)

ローマのカメラ修理業者、Rossi兄弟により開発・製造された極めて独特の35mmライカ判レンジファインダーカメラである。シャッターとして半円弧状の2枚の金属厚板を摺動させる方式を採用したため、それを収納するための特殊なボディ構造と形態とが必要となり、結果的に巻戻し機構を廃止してダブルマガジン方式を採用せざるを得ず、フィルムカッターの装着も必要となった(写真2参照)。ガンマは全く類型の見られないカメラである。ライカマウントによるレンズ交換機能に、Ⅲ型では1～1/1000秒のシャッターを備えるなど性能的には高級カメラであったが、実地使用には決して便利なカメラではなかった。しかし、

写真 1 ガンマ

写真 2 ガンマの内部

写真 3 ゾンネ C4

写真 4 クリスタル 53

写真 5 クリスタル R

1947年から3年間に2,196台が製造されたうちの約1500台が販売できたという実績が残されていることは、ワンロットが1,000台程度とされるイタリアでのカメラ製造業界から見て、比較的順調にユーザーに受け入れられたことが示されていると言ってよいであろう。

ベネシャン・ライカ

イタリアの北東部、ベニスの近郊で第二次大戦終了直後の一時期に数多くのライカコピーが作られた。これをイタリアではベネシャン・ライカと呼んでいる。

列挙すると、ゾンネがⅣ、Ⅴ、C（6頁、写真11）、C4の4種、クリスタル(CD)が2a、2S、3、3S、Standard、53、Rの7種、ヴェガ(AFIOM)の2種、合計13機種もあった。モデルが多くあることは、どれも単なるライカコピーでは終わらず、何らかの変化を持たせていたことを示すものと言えるが、ここではとくに目についた3機種を以下に示すにとどめる。

❄**ゾンネ C4（ガット、1953）　（写真3）**
ゾンネは典型的なライカコピーとしてスタートしたがC型（6頁、写真11）からファインダーに35mm用の窓を加えて三つ窓にし、C4型でビューファインダーを等倍の大型にしている。大ぶりに作られたボディ本体には変更はない。

❄**クリスタル 53（チナグリア、1953）（写真4）**
クリスタル3Sのビューファインダーを改良し、ファインダーフレームをセレクターダイアルにより28、35、75、90、105mm用に変更可能とした。

❄**クリスタルR（チナグリア、1954）（写真5）**
レンジファインダーを一眼式とし、ビューファインダーをオレンジ色に着色してピント合わせを容易にしている。

ベネシャン・ライカはどれも平均的な作りで、1モデル1000台程度の製造という。

ヤヌア（サン・ジョルジオ、1948）　（写真6）

戦後の比較的早い時期に軍需産業から転換したサン・ジョルジオ社が1948年に製造した35mmレンジファインダーカメラで、上質に作られていて、通常のライカコピーとは一線を画する高級カメラである。ロングベースのレンジファインダー、1～1/1000秒シャッター、1軸不回転シャッターダイアル、セルフタイマー、さらに光学露出計を持ち、当時のライカⅢ型の先を行くカメラであった。標準レンズには自前のEssegiまたはEthos 50mm F3.5があり、これらは写りの良いレンズである。

システムカメラとしての多数の付属品も揃えられていたと言うが、価格がライカⅢ型より高価であり、そのためか約3000台で製造中止となり、現在では希少で、きわめて高価なカメラとなっている。

イソ・レポーター（ISO、1953）　（写真7）

ISO社が1953年につくったレポーターはその3年前からあったビルクスを改良した35mmレンジファインダーカメラであり、少なくとも三つの特徴を持つ。第一はフィルム巻上げに迅速巻上げのためのトリガー機構をボディ底部に作りつけたことで、第二はファインダーに交換機構を取り入れたことであり、さらに第三の特徴はフォーカシング機構をコンタックスやニコンSのようなダイアル操作式にし、ヘリコイドにロック機構を設けたことである。カメラデザインにもこだわりがあったようで、他機には見られない特徴の示された高級35mmレンジファインダーに仕上がっている。写真に示したカメラはISOで製造されドイツのDr. Hensoldt社から販売されたHenso ReporterであるがISO Reporterと全く同じものである。

● 連動距離計式レンズシャッターカメラ

イタリアで作られた35mm連動距離計式レンズシャッターカメラはコンドルⅠおよびⅡ（5頁、写真6、7）、ペルラA、AⅠおよびⅡ、それにヘルマン オリンピックとむしろ少ないが、ここではなかでも珍しいヘルマン オリンピックを示しておく。

ヘルマン・オリンピック
（.フォトテクニカ、1955）（写真8）

第7回冬季オリンピック（1956年、コルチナ・ダンペッツォ）の公式カメラとして五輪マーク入りできわめて少量が製造・販売されたという。沈胴のさせかたに一工夫がある、仕上げのよいカメラである。

● 35mm距離目測式カメラ

前掲のライカ型カメラと並行して、エレットラ（シリオ、1945）、ラッキー（G.G.S.、1948）、クロスター、クロスターⅡ、ⅡA（6頁、写真13）、プリンセスS、プリンセスⅡ、プリンセス レコード（クロスター、1952～59）、ヘルマン(フォトテクニカ、1950)、コンドルJr.（フェラニア、1951）、クライン（クライン、1953）など数多くの35mm距離目測式カメラが製造され、ガンマからもアトラス（1950）、ステラ（1953）、アルバ（1956）、アトム（1957）が出された。ここではそのうちの3機種を示すにとどめる。

エレットラⅠ（シリオ、1945）　（写真9）

外形はライカⅠ型に似るが、50mm F8レンズ付きのレンズシャッターカメラである。1945年という戦後早くに出された。

クライン(クライン、1952)　（写真10）

小型であるが35mmフルサイズをダブルマガジンで撮るカメラである。前玉回転距離合わせがあるため単玉でも写りはよい。

ドゥカ（ダースト、1946）　（写真11）

8mmカメラに似た縦型で非常に小さく作られたラピッドフィルム採用の初心者用カメラである。5色ほどあったという。

● 35mm一眼レフ

イタリアの35mm一眼レフはレクタフレックスが製造されただけである。

レクタフレックス・スタンダード　（写真12）

レクタフレックスはローマの弁護士で、実業家でもあったTelemaco Corsi により企画・製

写真 9 エレットラ

写真 6 ヤヌア

写真 7 イソ・レポーター

写真8 ヘルマン・オリンピック

写真 10 クライン

写真 12 レクタフレックス・スタンダード

写真 13 レクタフレックス40,000

造され、1948年に登場したやや大柄のペンタプリズム搭載35mm一眼レフである。ということは、35mm一眼レフとしては世界で6番目であり、ペンタプリズム搭載の量産35mm一眼レフとしては世界初のカメラであった。横走りフォーカルプレーンシャッターの速度が1秒から1/1000秒までであったため、最初のカメラ名はレクタフレックス1000とも呼ばれる。1953年に当時の一眼レフでは最高の1/1300秒まで上げてレクタフレックス1300と呼ばれることになる。ミラーはクイックリターンではないがシャッターボタンを放すと自動的に復元する。特筆すべきはピントグラスにスプリットイメージ方式を初めて導入したことである。

その前の1952年にはシャッター速度を1/25～1/500秒にスペックダウンしたジュニアが1000台ほど作られている。結局、スタンダード型は合計11,000台が製造されたが、諸般の事情により1954年半ばに一時生産を中止したとされる。レクタフレックスは専用バヨネットによるレンズ交換を行うが、交換レンズとしてアンジェニュー、ソム・ベルチオ、カール・ツアイス、シュタインハイル、ハインツ・キルフィットなどの一流交換レンズメーカーから少なくとも標準レンズ16種類、広角レンズ3種類、望遠レンズ20種類、マクロレンズ2種類、計41種類が提供された。ここに示したレクタフレックス1000にはもっとも最初のソム・ベルチオ・フロール2.8・50mmが付けられていた。交換レンズについて特筆すべきは、アンジェニューがレクタフレックスのために製作したレトロフォーカスの広角レンズである。このレンズの登場により、ミラーアップせずに一眼レフで広角レンズを使用する道が拓かれた。

レクタフレックス40,000　　（写真13）

上述のようにレクタフレックス・スタンダードは1954年に一時製造中止となったあと、製造ラインをリヒテンシュタインのファドーツに移して1956年から改良型のレクタフレックス40,000が製造された。このカメラはペンタプリズムを大型化し、ミラーを拡大したうえにフィルムをレバー巻き上げとするなどの改良が施されていて、実機で見る限りその効果は明らかに認められるが、なぜか300台程度で生産は終了になっている。

レクタフレックス・ローター　　（写真14）

1953年に写真家フェデリコ・パテラーニの注文で開発されたカメラで、カメラの正面に取付けた大きな回転ターレットに標準、広角および望遠の3本のレンズを装着し、回転させて希望のレンズを撮影に用いる仕組みとなっているが、実際に使用してみて特殊な用途に用いるべきカメラであることが実感された。50台以下の販売実績とされる。

写真 14
レクタフレックス
ローター

●　二眼レフ

イタリアでは何故か二眼レフカメラはほとんど製造されなかった。本格的二眼レフとしてはラッキーフレックスが、またいわゆるファインダーレフとしてはエリオフレックスがあるだけである。

ラッキーフレックス(G.G.S.、1946)（写真15）

35mm二眼レフ自体が珍しいところに、終戦直後に2000台以下の製造で終わっているため、現在、市場ではほとんど見かけないカメラとなっている。フィルム給送法にノブ式とレバー式の2形式あったとされるがここではレバー式を示した。中間ギアを介しての前玉回転式距離合わせと独特のピントルーペ移動法や絞りに大陸絞りを採用していることが面白い。

●　ミニチュアカメラ

イタリアはいわゆるミニチュアカメラが盛んにつくられた国といえる。私の所有するものだけでもフォトネサ20×20mm（GPM、1945）、ルクシア18×24mm（COMI、1949）、ドゥカティ18×24mm(ドゥカティ、1950)、SCAT 8×11mm、(Scat、1950)、ガミ16（ガリレオ、1954）などがある。ここでは商業的にも成功したことで有名なガミ16のみを示しておく。

ガミ16（ガリレオ・ミラノ、1954）　　（写真16）

専用フィルムカセットに16mmフィルムを装填し12×17mmのフォーマットで撮る。レンズにエザミター1.9/25mmを付け、シャッターは1/2～1/1000秒、1眼式連動距離計はパララックス自動補正、レンズカバー1回の折畳み動作で3コマのフィルムの自動巻上げができるうえ光学露出計組込みという高級仕様のミニチュアカメラである。豊富なアクセサリーが供給された。

以上の戦後のイタリアカメラの紹介は、最後に主力となったイタリアらしい低価格で簡単なフェラニア社やベンチーニ社のカメラについては全く省略してしまい、万全なものとはいえないが、これで1945年から1960年ころまでのおおよそのイタリアカメラの流れを把握していただければ幸いである。

写真 11 ドゥカ

写真 15 ラッキーフレックス

写真 16 ガミ 16